在日外国人児童・生徒における日本語の主観表現の習得

鴻野 豊子

Acquisition of the Japanese Subjective Expressions by Foreign Children Living in Japan

Toyoko Kono

This paper presents the findings of (1) if there is any difficulty for foreign children to acquire subjective expressions and (2) age effect on learning subjective expressions.

The research was conducted by interviews of children who have been living in Japan immersed in the Japanese society, and have a lot of opportunities to speak the Japanese language. The data from these interviews, with both foreign and Japanese children was analyzed in terms of the frequency and quality of the use of the subjective expressions. The results are as follows:

① The foreign children who speak Japanese fluently can't use subjective expressions as adequately as the Japanese children whose native language is Japanese.

② It seems to be more difficult for the foreign children over 11 years of age to acquire subjective expressions than for the children under the age of 10.

【キーワード】主観表現　立場志向　事実志向　受身形　授受補助動詞　年齢

1.　はじめに

本稿は日本の公立小・中学校に通い日本語に触れる機会の多い外国人児童・生徒に対し、彼らの談話の中に主観表現がどのように現れるかという調査を行い、その調査データをもとに、次の2点について明らかにすることを目的とする。

(1) a.　成人の日本語学習者に見られるような主観表現習得の困難点が、外国人児童・生徒にも見られるのか。

b.　主観表現の習得に関して、年齢が影響してくるのか。

調査の結果、かなり流暢に日本語を話せると感じられる子どもでも、日本語母語話者のように主観表現を用いて物事を描写することは難しいということが明らかになった。また、年齢という面から考察すると、11歳以上の年長の子どものほうが10歳以下の年少の子どもより、主観表現に関しては習得困難であるという結果も得られた。

以下では、まず言語習得に関する先行研究と日本語の主観表現に関する先行研究を概観し、本研究で行なった調査の概要について述べる。そして、今回行なった調査に関する詳しい報告を行なうことにする。

2.　先行研究

2.1　子どもの第二言語習得に関する研究

子どもの第二言語習得については、Ervin - Tripp (1974)、Fathman (1975)、Ekstrand (1976)、Snow and Hoefnagel - Hohle (1978) などの先行研究がある。これらの研究は、子どもを年長者と年少者に分け、両者の第二言語の習得速度の比較を行なったものである。以上の研究で、見解が一致している点は、第二言語の統語、形態素の面において、年長の子どものほうが、年少の子どもより、習得が早いということである。また、その理由についても、年長の子どもの場合、すでに持っている認知能力が第二言語習得の促進に影響しているからであるとしている点で共通している。認知能力に関してPiaget & Inhelder (1969) は、人間の認知は16歳頃までに急速に発達してしまい、それ以後は比較的ゆっくりした速度で発達するとしている。彼によれば、11歳頃を境に、子どもは具体的な経験や直接的な知覚からしか物事を捉えられなかった段階から、論理的、抽象的な物事の考え方ができる段階へ入るとしている。このような移行段階は思春期に当り、Lennebergにより提唱された言語習得の臨界期説 (The Critical Period Hypothesis)（注[1]）と一致することになる。

2.2　主観表現に関する研究

2.2.1　「立場志向型」と「事実志向型」

本稿では、主に受身形、授受補助動詞、そして「～てしまう」という表現を主観

表現として取り上げる。まず、水谷 (1985) では、「立場志向」及び「事実志向」という概念を提唱し、「話者の立場から物事を捉えている」表現を「立場志向型」、「話者の立場が問題にされておらず、事実をそのままに述べている」表現を「事実志向型」と呼んでいる。次の (2) は、それぞれ「立場志向型」(2a)と「事実志向型」(2b)の表現の例である。

(2) a. 財布を　とられた。

b. だれかが　わたしの　財布を　とった。

本稿の調査では、ここで見たような「事実志向型」の文が外国人児童・生徒の発話に観察された。調査結果については次章で述べることにする。続いて、主観表現には、視点の問題が含まれるという理由から、日本語における「視点」についての言語学的研究について見ていく。

2.2.2　視点

Kuno & Kaburaki (1975)は、視点を表わす一手段として、「共感 (Empathy)」という概念を提案し、「話し手が文または談話中のいずれの人物側にたって事態を眺めているか」に注目し、様々な「視点ハイアラーキー」を用いて視点表現を説明している。この「共感 (Empathy)」という概念は、ある出来事を描写する際に、統語関係、談話、そして語彙の見地から、カメラ・アングルとしての話し手の自己同一視化を扱っている。しかし、Tokunaga (1986)でも指摘されているように、久野は、「共感 (Empathy)」という概念で、全てを説明しようとしているが、どのハイアラーキーが優先性を持つのか、明確にされていない。そこで、Tokunagaは、久野の「共感 (Empahty)」という概念では、すべてを説明できないとして、“Affective deixis”という概念を提唱し、話し手のダイクティックな位置を示す動詞について説明を行なっている。“Affective deixis”とは、文中のある名詞句に対する話し手の主観的な態度を示すもので、これは方向性をもつ日本語動詞において観察されるとして、方向性をもつ日本語動詞を次のように2つのタイプに分類している。

(3) Subject-Oriented Directional Verbs (主語中心動詞)

Speaker-Oriented Directional Verbs (話者中心動詞)

主語中心動詞は、話し手のダイクティックな位置を示さない動詞、反対に話者中心動詞は話し手のダイクティックな位置を示す動詞であるとしている。

話者中心動詞は、主に「行く」「来る」「くれる」という3つの動詞から成り、これらの動詞は「行く」と「来る」は空間的、時間的な面から、「来る」「くれる」は心理的な面から、話し手のダイクティックな位置を明確に示しているとTokunagaは述べている。そして、次の (4a) (4b) のように主語中心動詞を用いて描写される状況の中に話し手が含まれるとき、話し手は動作主の動作が話し手に関係しているということを言語的に示さなければならず、これは話者中心動詞を用いることによって示されるとしている。(4)の例文は明確なコンテクストがない場合、語用的に問題のある文となる。

(4) a. ?? トムは　私に　本を　貸した。
　　b. ?? トムは　私に　本を　売った。

(4a) (4b) が適格文となるためには、(5)のように、話者中心動詞を補助動詞として付加して主語中心動詞＋話者中心動詞の形にする必要があるということである。

(5) a. トムは　私に　本を　貸して　いった。
　　b. トムは　私に　本を　貸して　きた。
　　c. トムは　私に　本を　貸して　くれた。

本研究においても、外国人児童・生徒の談話の中で、話者中心動詞を付加せず、話者の主観的な態度を示していないものが多く見られた。そこで次に、本研究で行った調査概要について述べ、続いて調査結果について見ていく。

3. 調査概要

3.1. 調査対象者

調査は、外国人児童と日本人児童の両方を対象とし、外国人児童に関しては次のような条件に該当する者を調査対象者とした。

(6) a. 両親が外国語母語話者である者
　　b. 日本滞在年数が1年以上、2年未満である者
　　c. 日本の公立小・中学校に通っている者

分析に際し、以上の条件を満たす調査対象者を、次の（表 1）のように3つのグループに分けた。

（表 1）調査対象者

Aグループ	6歳～10歳	28名	中国語話者11名、ポルトガル語話者7名 スペイン語話者6名、韓国語話者2名 タガログ語話者1名、ベトナム語話者1名
Bグループ	11歳～18歳	28名	中国語話者16名、ポルトガル語話者5名 スペイン語話者2名、カンボジア語話者2名、 ラオス語話者1名、タガログ語話者1名、 ベトナム語話者1名
Cグループ	7歳～12歳	28名	日本語話者

A・Bグループはそれぞれ外国人児童・生徒であり、年齢により10歳以下をAグループ、11歳以上をBグループとした。グループを10歳、11歳を境に分けたのは、データを年齢や滞在期間などにより、いろいろと分析した結果、この分類方法をとることによって、一番明確にデータを処理することができたという理由からである。また、先行研究で取り上げたPiaget & Inhelder (1969) によれば、子どもは11歳頃を境に具体的な経験から物事を捉える段階から、抽象的な物事の捉え方ができるようになってくる段階へ入ると述べられており、この研究に従った。

3. 2.　調査方法

本調査では、せりふのない18コマの絵を子どもに見せ、ストーリーを日本語で話してもらうという方法をとり、それをカセットテープに録音、文字化した。

調査は、データ収集者が子どもの隣に座り、テープレコーダーを子どもの前に置き行なった。基本的にはデータ収集者は子どものナレーションに参加しないという形式をとったが、なかなかことばが出てこない子どもや、次のことばに詰まってしまうという場合には、データ収集者が、会話を促すようにしたり、子どものナレーションが円滑に進むためにあいづちを入れるようにした。また、また、以上の調査のほかにも、対象となる外国人児童・生徒自身に関するインタビューも行なった。そして、そのインタビューの結果は作成した調査表に記入をするという形式をとった。

3. 3. 調査材料

調査には、18コマの絵を使用した。この絵は、ある子どもの一日を描いたもので、調査対象の子どもが感情移入しやすいように、男の子用と女の子用の2種類を用意し、自分が絵の中の主人公の子どもであると思って話をしてもらった。なお、調査に用いた絵には、本研究の考察の中心となる主観表現が出てくる場面がいくつか含まれている。

以上のようにしておこなった調査結果について次に述べていく。

4. 調査結果

4. 1 主観表現の使用

4. 1. 1「受身形」(注 2) の使用

本調査では、使用した絵の中に受身形を用いて表現するという場面が2箇所あるが、次の表2、表3はその各場面での表現である。なお、以下の表は、各グループの人数を100%として、そのうち何人の発話に、それぞれの表現パターンが観察されたかという割合を示したものである。

（表 2）第3コマ目についての表現

	A	B	C
受身形	10.7%	7.1%	42.9%
てしまう	50%	46.4%	100%

（表 3）第17コマ目についての表現

	A	B	C
a. 受身形	17.9%	21.4%	60.7%
b. ？受身形（誤用）	3.6%	5.0%	0%
c. ϕ（能動文）	71.4%	50.0%	35.7%
d. 不明(注 3)	7.1%	3.6%	3.6%
合　計	100%	100%	100%

子どもたちの談話において、表3の場面を描写するために、次の(7)のような3つの発話パターンが観察された。

(7) a. 主人公自身の視点を正しく、適切に述べているもので、構文的にも語用的にも適格文（立場志向型）

例：　僕はおじいさんに怒られて泣きました。

b. 主人公自身の視点を表わそうとしているが、調査で使用した絵で示されている事実と子どもが生成した文の内容とが異なり、語用的には不適格な誤用文となっているもの

例：　おじさんが怒られました。

c. 受身形を使用せず主人公自身の視点から述べていないもの（事実志向型）

例：　おじいちゃんは怒った。

以上の結果から、受身形の使用について、次のような傾向が見られる。

(8) a. 外国人児童・生徒の受身形の出現率が非常に低い

b. 年長の外国人児童・生徒における誤用文の出現率が高い

c. 受身形以外の主観表現の出現率は高いが、日本語母語話者に比べると、やはりその出現率は低い

(8)で示したように外国人児童・生徒の受身形の使用は非常に少なく、反対に、主人公の視点を表わさず、事実をそのまま述べる事実志向型の文を使用するケースが非常に多いという傾向が見られた。そして、主人公の視点を表わそうとして、形の上では動詞の受身形を使用している場合でも、絵で示されている事実にそぐわない発話となって現われるという誤用が、外国人児童・生徒の発話には多く見られた。このような誤用は、外国人児童・生徒のなかでも、特にBグループの11歳～16歳の間に顕著に現われた。また、第3コマ目を描写する際に、日本語母語話者の子どもであるCグループにおいても、受身形を使用しないケースが多かったのだが、彼等はその代わりに受身形以外の主観表現を用いて、主人公の視点からの描写を行なっていた。例えば、「～て行く」「～て行ってしまう」「～しまう」などがそれである。これらの補助動詞は、話し手を中心にその指示方向を示すというダイクティックな動詞を含む表現や、話し手の主観的な気持ちを表わす表現である。外国人児童・生徒の発話においても、受身形の出現率に比べると、比較的、上に挙げた

ような主観表現が多く用いられていた。しかし、日本語母語話者の子どもと比較すると、外国人児童・生徒の主観表現の出現率は、日本人の子どものおよそ半分であり、決して高いとは言えない。従って、これまでの調査結果から、一般に、比較的早くことばを習得してしまうと考えられている外国人児童・生徒においても、主観表現の習得に関してはそれほど容易なことではないと思われる。

4.1.2　「授受補助動詞」の使用

本調査では、受身形以外にも主観表現として、日本人と外国人の子どもたちの発話の中に授受補助動詞がどのように現われるかということについての調査も行ない、調査用の絵の中に授受表現が用いられる場面を2場面導入した。そして、この中で次の3つの発話パターンが観察された。

(9) a. 「てくれる／もらう」を用いた表現

例：お姉さんはアイスクリームを買ってくれました。

お母さんにたのんで買ってもらいました。

b. 「てあげる」を用いた表現

例：お母さんがアイスクリーム買ったあげた。

c. 授受補助動詞が付加されておらず、視点を表わしていない表現

例：母さんがアイスクリームを買った。

そして、(9a)の「てくれる／もらう」を用いた表現の中には、次のような誤用文も含まれている。

(10) a.？ お兄さんが私に帽子をとってもらった。

b.？ それからお母さんが買ってもらって、

(10)は、文法的には適格であるが、調査で使用した絵の内容を忠実に伝えておらず、誤用的には適格ではない文である。これらの3パターンの表現が、外国人児童・生徒の談話の中で、どのくらいの割合で観察されるかについて示したのが次の表4である。これは［各グループの人数×2場面］を100%として、そのうち授受補助動詞がどのくらいの割合で見られたのかを示している。

（表 4）授受補助動詞の出現率

	A	B	C
くれる／もらう	66.1%	48.2%	100%
あげる	8.9%	17.9%	0%
ϕ	25.0%	32.1%	0%
その他（注[4]）	0%	1.8%	0%
合　計	100%	100%	100%

次に挙げる表 5は、各グループで見られた「てくれる／もらう」の使用を100%として、そのうち文法的であるが、語用的には適切ではない誤用文の出現率を示したものである。

（表 5）授受補助動詞の使用に見られる誤用の割合

	A	B	C
誤用文	10.8%	22.2 %	0%

表5に示したように、年少の外国語母語話者グループであるAグループに比べて、年長のBグループのほうが誤用文の出現率が高いことが分かる。これは、前節の受身形の分析の際に見られた誤用文の出現率と同様の結果を示している。以上、授受補助動詞に関してまとめると次のようになる。

(11) a. 全体として「てくれる／もらう」を使用するケースが多いが、日本語母語話者の子どもにおける使用と比較するとその割合は低い

b. 本動詞に授受補助動詞を付加しない表現、つまり主人公の視点を表わさない表現が外国語母語話者には非常に多く、特に年長グループに多く見られる

c. 日本語母語話者の子どもにおいては見られなかった「てあげる」を用いたケースが外国人児童・生徒において観察され、特に年長グループで出現率が高い

d. 外国人児童・生徒に誤用文が見られ、特に年長グループの出現率が高い

授受動詞を使用すべき場面で、日本語母語話者は「てくれる／もらう」を使用しているのに対し、外国人児童・生徒は、「てあげる」を使用したり授受補助動詞を用いなかったりというケースが多く観察された。大塚（1995）では、「あげる」というのは、授受動詞の中でも、話し手の視点と文の主題が一致しているために早い段階で習得され、使い易い表現であるとしている。また日本人の幼児の第一言語習得を扱ったClancy（1985）においても、「あげる」は最も習得し易いと言及している。これらのことからも、外国人児童・生徒であるA・Bグループは、この比較的習得しやすい「あげる」を使用して場面の描写をしたものと考えられ、これらは、「あげる／くれる／もらう」の習得が、まだきちんと確立していないために起こるものと考えられる。そして、これらの表現、つまり「てあげる」を用いた表現や授受補助動詞を用いず主人公の視点を示さない表現などは、外国人児童・生徒の年長グループに顕著に見られた。また、授受補助動詞を使用した際に生じる誤用についても、やはり年長グループに高い割合で観察されたということも特徴的である。

以上、「受身形」と「授受補助動詞」の分析から、外国人児童・生徒の主観表現について、次のようにまとめることができる。

(12) a. 全体的に、外国人児童・生徒に関しては、受身形、授受補助動詞「てくれる／もらう」、そして「てしまう」という主観表現の出現率が低い

b. 年齢という面から見ると、主観表現を用いないケースは、外国人児童・生徒の年長者に多く、また受身形や授受補助動詞の誤用に関しても年長グループに多く観察される

c. 受身形、授受補助動詞の誤用は、様々な言語母語話者に見られる

以上が、本研究で行なった調査の結果を分析し得られた傾向である。そして、調査結果の中で、最も外国語話者の発話を特徴付ける現象として、受身形や授受補助動詞の誤用というものがあった。これらは、日本人の子どもの発話には全く見られず、外国人児童・生徒の発話にのみ観察されたものである。そこで次節で、このような誤用文について取り上げてみる。

4.1.3. 外国人児童・生徒における誤用文

前節で見たような受身形と授受補助動詞の誤用文は、7歳から12歳の日本人の子どもには全く観察されなかった。ところが、外国人児童・生徒の発話には、次の表6に挙げるように、誤用が観察された。表6は、受身形なら各グループの人数を100%として、また授受補助動詞なら、授受補助動詞が使用される場面が2場面あったという理由から、［各グループの人数 × 2場面］を100%として計算を行なっている。

（表 6）外国人児童・生徒の発話中の誤用文の出現率

	A	B
受身形	3.6%	25.0%
授受補助動詞	10.8%	22.2%

表6から、受身形、授受補助動詞共に、11歳以上の年長グループにおいて誤用文の出現率が高いことが分かる。言語を習得する際に見られる誤用文については、Cazden (1968)とBrown, R. (1973)でも触れられている。彼等は、英語の第一言語習得の研究として、3人の子どもから収集した言語サンプルをもとに文法形態素の発達過程について明らかにしている。そして、子どもたちから得られた習得過程において、年少では正しい形態を用いていたにもかかわらず、年長で誤用になるケースについて言及し、Cazdenは、子どもたちの観察から、英語動詞の不規則形(irregular form)の習得過程として、次のような3つの期間を仮定している。

(13) ① 別々の語彙登録としての意味的に関連のある言葉の習得の期間

例：“come”と“came”

② 一般規則を習得し、語彙登録を再構築する期間

例：“come”［−regular past］

“came”［＋past］

過度の一般化は、この語彙の再構成の期間中に起こる

例：“comed”

③ 大人の語彙登録達成

本調査において見られた年長の誤用というのは、習得の途中の段階のものであり、上の3段階のうち語彙登録を再構築している②の段階にあると言える。上で見

たように第一言語の習得過程において観察される現象が、第二言語習得の過程においても同じように観察されることが分かる。

今回の調査では、受身形や授受補助動詞の誤用は、様々な言語話者の子どもに観察され、これらの誤用は、Clancy (1985)によると、日本人の子どもが母語を習得する際にも、つまり日本語の第一言語習得の際にも観察される現象であるとしている。また、成人の日本語学習者における第二言語習得としての日本語習得を扱っている田中 (1996) においても、受身形や授受補助動詞の誤用について指摘している。つまりこのことは、構文上は文法文であるが語用的には適切ではない誤用文は、言語の違いから生じるものではなく、受身形と授受補助動詞の習得において普遍的なものであるということを示していると考えられる。

そして以上のような誤用を用いていた子どもたちは、理解レベルに関しても混乱しているという点で共通している。調査において18コマの絵を見て物語ってもらった後に、上のような誤用が見られた子どもに対して、次のようなインタビューを行なった。例えば、「おばあちゃんが怒られて…」という誤用文を用いていたAグループの子どもに対して、「誰が怒られたの？」と質問したところ、「このおばあちゃん」という答えが得られ、「誰が怒ったの？」という問に対しても「おばあちゃん」という答えが返ってきた。このような傾向は受身形について誤用文を用いていたほとんどの子どもに同じように見られた。また、授受補助動詞についても、「お母さんが買ってもらった」という誤用文を用いていた子どもに対し、「誰が買ってもらったの？」「誰が買ったの？」という各質問をしたところ、やはり「お母さん」という答えが得られた。以上のことから、受身形、授受補助動詞を用いる子どもたちは、理解のレベルにおいても混乱しているということが分かる。

5. まとめ

今回の調査で、普通、日本語母語話者の子どもなら主観表現を用いるという場面において、外国人児童・生徒では、主観表現を用いずに場面を描写するいわゆる事実志向型の文を使用するというケースが非常に多く見られ、このような特徴は、ある特定の言語話者の子どもではなく、様々な言語話者の子どもに共通して観察された。そして外国人児童・生徒の中でも11歳以上の年長の子どもにおいて、主観表現を用いないで場面を描写するというケースが多く見られた。また、日本語の主観表

現の習得に関して、そのほかの特徴としては、受身文や授受補助動詞の誤用が挙げられる。これは、調査の絵の中に登場する主人公自身の視点を表わそうとはしているが、語用的に不適切な発話になってしまったというものである。このような誤用は、7歳から12歳の日本人児童には全く見られず、従って外国人児童・生徒の発話の中で最も特徴的なものであると言える。そしてここでも、年長の外国人児童・生徒においてこのような誤用例が多く観察された。これまでの日本語以外の外国語における子どもの第二言語習得の先行研究では、年齢の高い子どものほうが年齢の低い子どもより習得が早いという結果が得られていたが、本論の調査では、日本語の主観表現に関する限り、これらの先行研究とは異なる結果が得られた。

今回、調査の対象となった子どもについては、日常生活を送る上での日本語に不自由している者は少なく、かなり流暢に日本語を使いこなせる印象のある子どもが多かったが、本調査では、主観表現を用いて表現している子どもは少ないという結果が得られた。つまり、かなり流暢に日本語を話す子どもでも、日本人児童と比べた場合、外国人児童・生徒は日本人児童ほどの日本語の表現力はなく、主観表現の使用が困難であるということである。

最後に、今回の調査では、様々な言語母語話者の子どもに主観表現を欠いた表現が共通に見られたという結果にとどまったが、今後はさらに各言語における主観を表わすときの言語現象について考察し、日本語の主観表現と比較対照し、その相違点を明らかにすることによって、今回の調査結果に各言語の影響が及んでいないかという問題についても課題として扱っていきたい。

追記: 本稿は、1996年1月に神田外語大学に提出した修士論文の一部に手を加えたものである。本稿をまとめるに当って御指導くださった徳永美暁先生、貴重な御助言をくださった神田外語大学の諸先生方及び学友に対し、心より感謝したい。また、調査に当って協力いただいたボランティア団体、学校関係者の方々に心からの御礼を申し上げる。

言語科学研究第4号(1998年)

注

1 臨界期説とは言語習得に臨界期が存在するという仮説であり、Lenneberg (1967)により提唱されたものである。ここでの臨界期とは、その時期までは言語習得が容易に行われるが、それ以降になると不可能になるという生物学的時期のことを言うということである。この臨界期がいつ頃起きるのかということに関しては、思春期 (Puberty)という説が伝統的であるが、これは臨界期以降の第二言語習得が成功しないことを意味するものではないということである。

2 本稿にては、話し手あるいは、その事柄の受け手（つまり主語としてのX）が、動作主のXに対してする行為を迷惑に思っているとか、不快に思っているということを示す主観表現である受身形に焦点を当て分析を行なう。

3 不明というのは、子どもの発話の中に第17コマ目についての描写が現われなかったために出現率として計算できなかったものを示している。

4 「その他」の発話例として、次のような例を挙げることができる。
お母さんがアイスを買いに行った。

参考文献

大塚　純子　(1995)「中上級日本語学習者の視点表現の発達について—立場志向文を中心に—」『言語文化と日本語教育』9号　日本言語文化学研究会; 281-292.

久野　ﾛ章　(1978)『談話の文法』大修館書店

田中　真理　(1996)「視点・ヴォイスの習得 — 文生成テストにおける横断的及び縦断的研究— 」『日本語教育』88；104 - 116.

徳永　美暁　(1994)「言語表現と文化—日本語と英語 —」『異文化コミュニケーション』7; 97-116.

水谷　信子　(1985)『日英比較　話しことばの文法』くろしお出版

Brown, R.　(1973) A First Languag : The Early Stages. Harvard University Press.

Cazden, C.　(1968) "The acquisition of noun and verb inflections" *Child Development 39*; 433 - 48.

Clancy, P. M. (1985) "The acquisition of Japanese" In D. I. Slobin(ed), *The Crosslinguistics Study of Language Acquisition Vol.1.* Hillsdale, N. J : Lawrence Earlbaum Assosiates; 373 - 524.

Ekstrand, L. H. (1976) "Age and length of residence as variables related to the adjustment of migrant children,with special reference to second language learning " In Nickel, G. (ed.) *Proceedings of the Fourth International Congres of Applied Linguistics 3；* 79 - 97 Hochschulverlag, Stuttgrart.

Ervin-Tripp, S. (1974) "Is second language learning like the first ?" *TESOL Quarterly 8*; 111 -27.

Fathman, A .(1975) "Language background, age and order of acquisition of English structures." In Burt, M. and Dulay, H. (eds.) On *TESOL '75. TESOL* Washington, D. C.

Kuno, S. & E. Kaburaki (1975) Empathy & Syntax" in Kuno(ed.) *Harvard Studies in Syntax & Semantics 1.*

Lenneberg, E. H.(1967) *Biological Foundations of Language.* New York : Wiley.

Piaget, J. & Inhelder, B. (1969) *The Phychology of the child. London*: Routlede & Kegan Paul.

Snow, C. and Hoefnagel - Hohle, M .(1978) "The critical period for language acquisition: evidence from second language learning" *Child Development 49*; 1114-28.

Tokunaga, Misato.(1986) *Affective Deixis in Japanese: A Case Study of Directional Verbs.* Ph. D. dissertation. University of Michigan.University Microfilm International Inc.